兵庫公演 兵庫県立芸術文化センター KOBELCO大ホール	東京公演 サントリーホール 大ホール
6月22日(土)、23日(日) 15:00開演(14:15開場)	6月25日(火)、26日(水)、27日(木) 19:00開演(18:15開場)

プログラムA
6月22日、25日、27日

ワーグナー：歌劇『さまよえるオランダ人』序曲
ドビュッシー：歌劇『ペレアスとメリザンド』組曲(ラインスドルフ編)
バルトーク：歌劇『青ひげ公の城』(演奏会形式・日本語字幕付)
エリーナ・ガランチャ(メゾソプラノ) クリスチャン・ヴァン・ホーン(バスバリトン)

プログラムB
6月23日、26日

モンゴメリー：すべての人のための讃歌(日本初演)
モーツァルト：アリア「私は行きます、でもどこへ」「ベレニーチェに」
リセット・オロペサ(ソプラノ)
マーラー：交響曲第5番 嬰ハ短調

［チケット料金］ (全席指定・税込)

【プログラムA】 6月22日、25日、27日 S席 ¥40,000 A席 ¥35,000 B席 ¥32,000 C席 ¥28,000 D席 ¥24,000 E席 ¥20,000
［東京公演プログラムAのご注意］C席は字幕がご覧になりにくい席となります。また、D席・E席は字幕をご覧いただけません。

【プログラムB】 6月23日、26日 S席 ¥36,000 A席 ¥31,000 B席 ¥28,000 C席 ¥24,000 D席 ¥20,000 E席 ¥16,000

［チケット販売窓口］

電話・店頭 芸術文化センターチケットオフィス TEL：0798-68-0255
(10:00～17:00 月曜休・祝日の場合は翌日)

Web 芸術文化センターチケットオフィス、チケットぴあ、ローソンチケット、イープラス、CNプレイガイド、フジテレビダイレクト

兵庫公演 チケットのお求めはこちら▶

［チケット販売窓口］

電話・店頭 サントリーホールチケットセンター TEL：0570-55-0017
(オペレーター対応10:00～18:00 休館日を除く)

Web フジテレビダイレクト、チケットぴあ、ローソンチケット、イープラス、サントリーホールチケットセンター

東京公演 チケットのお求めはこちら▶

［お問い合わせ］芸術文化センターチケットオフィス
0798-68-0255 (10:00～17:00 月曜休・祝日の場合は翌日)
※車椅子のご予約は、芸術文化センターチケットオフィスにてお申し受けいたします。
※公演に関するお問い合わせは、クラシック事務局まで。

［お問い合わせ］クラシック事務局
0570-012-666 (平日12:00～17:00)
※車椅子のご予約は、クラシック事務局にてお申し受けいたします。

【公演に関する注意事項】
※一度お求めいただきましたチケットは、公演中止の場合を除き、キャンセル・変更をお受けすることが出来ません。
また、病気やその他都合により、出演者、曲目、曲順が変更になる場合も、払い戻しは承りません。
※未就学児童のご同伴やご入場、お子様を膝の上にお乗せになりながらの鑑賞はご遠慮ください。
※開演時間に遅れますと休憩までご入場をお待ち頂くか場内指定位置でのお立ち見のご案内となります。

公式サイト https://www.met-japan-tour.jp/
公式サイトQRコード

龍角散ダイレクト®
たん、せき、のどの炎症による声がれ・のどの不快感に

龍角散ダイレクト スティック ミント (16包入り) 第3類医薬品

龍角散ダイレクト スティック ピーチ (16包入り) 第3類医薬品

株式会社 龍角散 東京都千代田区東神田2-5-12
お客様相談室 03-3866-1326 10:00～17:00(土・日・祝日を除く) https://www.ryukakusan.co.jp/
※服用の際は説明文書をよくお読みのうえ、正しくお使いください。
※「龍角散」「龍角散ダイレクト」「ゴホン！といえば龍角散」は(株)龍角散の登録商標です。

龍角散 Ryukakusan Presents

ヤニック・ネゼ＝セガン指揮 METオーケストラ来日公演

THE MET ORCHESTRA conducted by YANNICK NÉZET-SÉGUIN 2024

世界三大オペラ「メトロポリタン歌劇場」が誇るオーケストラとスター歌手たち
グラミー賞に輝くヤニック＆METオケのサウンドと現代最高峰の声 —— 13年ぶり待望の来日

©Jonathan Tichler/Met Opera

2024
6.22(土) 23(日) 兵庫県立芸術文化センター KOBELCO大ホール
6.25(火) 26(水) 27(木) サントリーホール 大ホール

©Evan Zimmerman/Met Opera
©George Etheredge
ヤニック・ネゼ＝セガン (指揮)

©Christoph Köstlin
エリーナ・ガランチャ (メゾソプラノ)

©Simon Pauly
クリスチャン・ヴァン・ホーン (バスバリトン)

©Steven Harris
リセット・オロペサ (ソプラノ)

主催：フジテレビジョン／朝日新聞社／関西テレビ放送(兵庫)／兵庫県、兵庫県立芸術文化センター(兵庫)
後援：アメリカ大使館 協力：松竹／WOWOW 運営協力：キョードー大阪(兵庫)
招聘・制作：フジテレビジョン 特別協賛：龍角散

METオーケストラアジアツアーはバンク・オブ・アメリカ およびロレックスによる支援を受けています。

BANK OF AMERICA ROLEX

公式サイトQRコード

©Jonathan Tichler/Met Opera

ニューヨーカーたちが
スタンディングオベーションで興奮する、
ヤニック・ネゼ=セガン指揮METオーケストラ

親愛なる日本の皆様へ

皆様は世界で、宇宙で、最も素晴らしい音楽ファンの一員です。
この偉大なる楽団とは初となる日本公演に、
METがご提供できる最高のものをお届けすることを約束し、
皆様の記憶に残るものとなるよう全身全霊を捧げます。

ヤニック・ネゼ=セガン

©Chris Lee

METオーケストラ（メトロポリタン歌劇場管弦楽団）の魅力

音楽ジャーナリスト：小林伸太郎
（ニューヨーク在住）

メトロポリタン・オペラの管弦楽団は、世界で最も忙しい管弦楽団の一つだ。年間200回近くの公演のためにオペラハウスのピットに入り、それに加えカーネギー・ホールでの演奏会も定期的にあり、いつも大変な人気だ。

ヤニック・ネゼ=セガンが2018年に音楽監督に就任してからも、定期演奏会はもちろん、コロナ後初の演奏会となったリンカーン・センターの野外会場でのマーラー交響曲第2番、同時多発テロ20周年でのヴェルディ「レクイエム」など、オーケストラ作品の感動的な演奏が続いている。2021年9月には、MET史上初の黒人作曲家によるオペラでコロナ後初のシーズンを開幕させたことも記憶に新しい。彼らのインパクトが社会的にも高まる中、ニューヨークのオーケストラといったら、ネゼ=セガン率いるMETオーケストラを最初に思い出すニューヨーカーも少なくないのではなかろうか。ニューヨーク・タイムズ紙も、2021年11月に「ヤニック・ネゼ=セガンは今やニューヨークの指揮者」と題する記事で確固とした存在感の高まりをレポートしている。

去る2月1日には来日公演と同じマーラー交響曲第5番の演奏が行われ、早くから完売となり盛況だった。重々しい葬送行進曲に始まり、激しい嵐、アダージェットの静謐感を経て、輝かしいエネルギーの炸裂で終わる本曲に、現在を意識しないのはむしろ不可能かもしれない。そういった感じ方も含めて、聴き手の自由な受け取り方を尊重した、彼のポジティブなエネルギーそのままに懐の深い演奏であった。その心地よさは、いつ終わるとも知れないマーラーの最終楽章にあっても聴衆を置き去りにすることなく、最後の歓喜へと着実に導いてくれた。

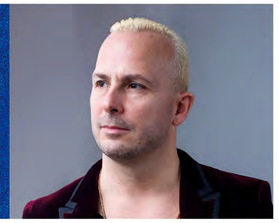
演奏後のカーテンコールでは、スタンディングオベーションで興奮する観客に、オーケストラを立てながら満面の微笑みと共に全身から溢れる喜びで応えていた。そんな彼らのポジティブなエネルギーが、13年ぶりとなる日本公演でも披露されるだろう。

MET オーケストラ（メトロポリタン歌劇場管弦楽団）
The Met Orchestra

©Evan Zimmerman / Met Opera

1883年メトロポリタン歌劇場（MET）創立とともに発足。オペラとコンサートの両方で革新を重ね、カーネギーホールでの定期演奏会は常に即完売。20世紀最高指揮者の一人トスカニーニは同楽団の指揮で米国デビューを果たしたほか、ラフマニノフ、ルービンシュタイン、カザルス、ホフマン、ブゾーニ、ハイフェッツ、クライスラー、パールマン、ブレンデル、ポリーニ、キーシン、テツラフ、フレミング、ディドナートなど各時代の名演奏家たちと共演を重ねている。

ヤニック・ネゼ＝セガン（指揮）
Yannick Nézet-Séguin, conductor



©George Etheredge

2018年メトロポリタン歌劇場音楽監督就任。フィラデルフィア管音楽監督、モントリオール・メトロポリタン管芸術監督兼首席指揮者、ロッテルダム・フィル名誉指揮者も務める。ベルリン・フィルやウィーン・フィルなどとも緊密な関係を築き、スカラ座、ロイヤル・オペラ、ウィーンなどの歌劇場や世界主要音楽祭にも度々登場。これまでにグラミー賞11部門にノミネートされ、2023年はMETオーケストラおよびルネ・フレミングとの作品で2つのグラミー賞に輝いた。

エリーナ・ガランチャ（メゾソプラノ）
Elīna Garanča, mezzo-soprano

6.22（土）、25（火）、27（木）

©Christoph Köstlin

現代最高メゾソプラノの一人。マイニンゲン、フランクフルト、ウィーン国立などの歌劇場を経て、METには2008年『セビリアの理髪師』ロジーナ役でデビュー以来定期的に登場。バイロイトやザルツブルク音楽祭、ロイヤル・オペラ、ベルリン、スカラ座、マドリッドなどの主要歌劇場出演に加え、サンタ・チェチーリア管とのヴェルディ『レクイエム』やリサイタルなども世界各国で大好評を博している。

クリスチャン・ヴァン・ホーン（バスバリトン）
Christian Van Horn, bass-baritone

6.22（土）、25（火）、27（木）

©Simon Pauly

2013年『ファルスタッフ』ビストーラ役でMETデビュー。その後『ラ・ボエーム』『アイーダ』『ノルマ』『放蕩息子の遍歴』『フィガロの結婚』など幅広い作品で出演多数。2018年「リチャード・タッカー賞」受賞で一気に注目を集める。ウィーン、バイエルン、パリ・オペラ座、シカゴ・リリック、ザルツブルクなどの主要歌劇場や、シカゴ響、ロイヤル・コンセルトヘボウ管などとのコンサートにも定期的に登場。

リセット・オロペサ（ソプラノ）
Lisette Oropesa, soprano

6.23（日）、26（水）

©Steven Harris

METリンデマン・ヤングアーティスト・プログラムを経て、2006年『イドメネオ』でMETデビュー。以来、18役で150公演近くMETに出演。最近ではウィーンで『ウィリアム・テル』、パリ・オペラ座で『ジュリオ・チェーザレ』、東京とナポリで『椿姫』などに登場。ザルツブルク、グラインドボーンなどの音楽祭や、ロイヤル・コンセルトヘボウ管、サンタ・チェチーリア管などのコンサートにも度々招かれている。

演奏曲目の聴きどころ

音楽評論家：香原斗志

プログラムA　世界最高峰の歌手を得て空前絶後の《青ひげ公の城》

このプログラムがうれしいのは、20世紀を代表する作曲家、バルトークの《青ひげ公の城》を最高の演奏で聴けることである。

劇中の登場人物は青ひげ公と新妻のユディットだけ。二人が訪れた青ひげ公の城には7つの扉があり、ユディットの求めに応じて一つずつ開けられ、最後の扉が開くと公の3人の先妻が現れる。そして、4人目の妻として迎えられたユディットと3人は扉の向こうに姿を消す――。

表現主義に近い手の込んだ音楽が、大編成のオーケストラによって奏され、扉が開くたびに調性が変わって明るさや色彩も移ろう。音楽の構造自体が「城」のようだ。

二人の歌手がすごい。青ひげ公を歌うのはニューヨーク生まれのクリスチャン・ヴァン・ホーン（バスバリトン）。圧倒的美声と明瞭な響きが力まずに発せられ、深い精神性が込められる。心理劇の色彩が濃い青ひげ公の朗唱に、これ以上の歌手はいない。ユディットはラトビア生まれのエリーナ・ガランチャ（メゾソプラノ）。歴史に残る大歌手に成長した彼女は、高貴な声を広い音域で自在に輝かせ、曲想に応じて気品ある翳りを添えたかと思えば、妖艶さを浮き上がらせる。変幻自在な気高い歌唱で、ユディットがどれほど輝くことか。

©Evan Zimmerman / Met Opera

最初から舞台にいる二人の前で扉が開けられていく物語は、聴き手が場面を見失いにくい、演奏会形式に適した作品だ。しかも、演奏が豊かなほど想像力は刺激され、下手に演出されるより音楽体験は豊かになる。

前半にはワーグナーの《さまよえるオランダ人》序曲と、ドビュッシー《ペレアスとメリザンド》組曲も聴ける。半音階や不協和音が活用された前者と、色彩と陰影に富む後者。加えて音楽の「城」。いずれも、ネゼ=セガン率いるMETオーケストラの実力がいかんなく発揮される。そこに空前の名歌手も加わり、まことに得難い演奏会である。

プログラムB　世界一の歌姫オロペサの珠玉のモーツァルトとMETの真の力が伝わるマーラー

現在、世界の主要歌劇場や音楽祭からもっともオファーが殺到しているソプラノ、リセット・オロペサ。このプログラムでは、そんな世界一の歌姫による珠玉のモーツァルトを聴ける。

「私は行きます、でもどこへ」は、作曲家マルティン・イ・ソレールのオペラに挿入された。モーツァルトは《コジ・ファン・トゥッテ》の初演でドラベッラを歌ったルイーズ・ヴィルヌーヴに求められ、彼女が歌うアリアを書いてあげたのだ。卓越したソプラノだったヴィルヌーヴの力が発揮されるように、技巧的なコロラトゥーラと叙情的なカンタービレがともに織り込まれている。

「ベレニーチェ」はモーツァルトが少年のころ、ザルツブルクで作曲したレチタティーヴォとアリア。バロック時代のオペラ・セリア（正歌劇）並みに高度なコロラトゥーラの技巧が必要とされる。

オロペサが輝かしいコロラトゥーラに魂を通わせる力も、劇的場面に深い感情を込めて聴き手の心を奪う力も、2023年のローマ歌劇場日本公演などで、日本のファンに強く印象づけられた。作品のスタイルごとに声の用法を柔軟に変え、描かれる感情に即して色彩やニュアンスを加えるオロペサ。そんな彼女がもっとも得意な作曲家の一人が、じつはモーツァルトである。加えれば、彼女のキャリアはMETのナショナル・カウンシル・オーディションでの優勝からはじまっている。ホームグラウンドで、世界を席巻する歌姫の至芸はいっそう輝くだろう。

©Chris Lee

むろん、ネゼ=セガン率いるMETオーケストラの演奏も、オロペサ同様に柔軟だ。モーツァルトの前には、リッカルド・ムーティの委嘱でモンゴメリーがコロナ禍に祈りを込めて書いた「すべての人のための讃歌」が日本初演される。後半はマーラーの交響曲第5番。ロマン的叙情も、情熱も、葛藤も、どれほど高い次元で表現されることだろうか。楽しみでならない。